

# 熊野灘宇久井定置網によるマアジの漁獲特性\*

向野 幹生・武田 保幸

## 目 的

宇久井定置網は和歌山県熊野灘側を代表する組合自営の大型定置網である(図1)。1982年に二段箱網導入による漁具の改良を行ったことで漁獲量が改良前の約4倍になり、それまでの経営不振から脱却した成功事例としてよく知られている。主要な漁獲対象魚種はブリとサワラであるが、大量に入網するアジ類・サバ類・ソウダガツオ類等の多獲性浮魚類の比重も大きい。特にマアジは魚価が比較的高く、近年増加傾向にあることから、漁業関係者の関心が高い。本報告では、宇久井定置網でのマアジの漁獲特性を明らかにすることを目的に、漁獲資料等の解析を行った。

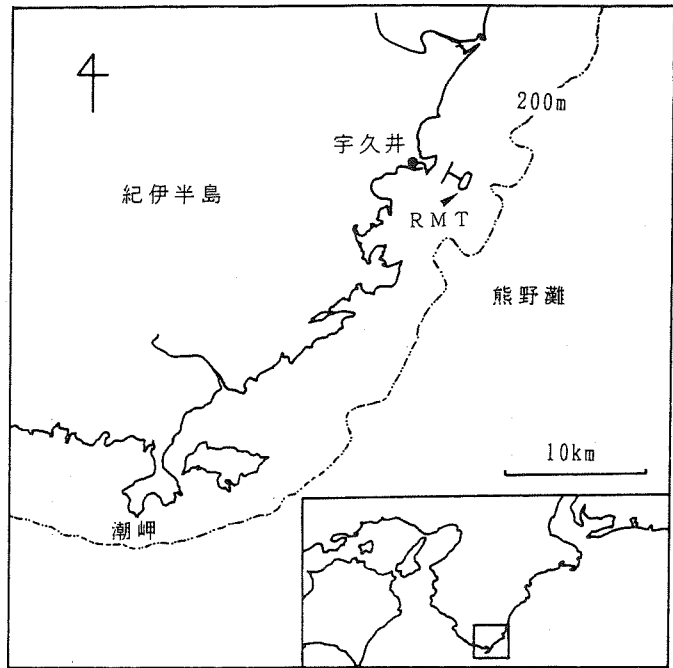


図1 宇久井定置網の漁場位置

## 方 法

資料は、(1) 宇久井漁協大敷水揚帳(1985年1月～1994年12月)、(2) 農林水産統計 漁業・養殖業生産統計年報(1965～1994年)の県別魚種別漁獲量、(3) 南西海ブロック長期予報会議資料(1985～1994年)、(4) 市場での体長測定結果(1985年1月～1994年12月)、(5) 和歌山県水産試験場が宇久井定置網に設置している自記水温計RMTによる水温連続観測結果(1986～1994年3～6月)を用いた。当漁協の大敷水揚帳は日別・魚種別・銘柄別に詳細に記帳されており、マアジの漁獲量をまず日別・銘柄別に整理した後、それを月別・年別に集計した。

マアジの銘柄は体長別に「アジゴ」(約7cm以下)、「小」(約8～15cm)、「中」(約16～20cm)、「大」(約21～25cm)、「特大」(約26cm以上)の5種類に分けられている。

## 結 果

熊野灘の位置する太平洋中区のマアジ資源は、1978～1985年の間は全国と同様に低水準にあったが、

\* 南西外海の資源・海洋研究第13号(1997)に要旨として掲載。

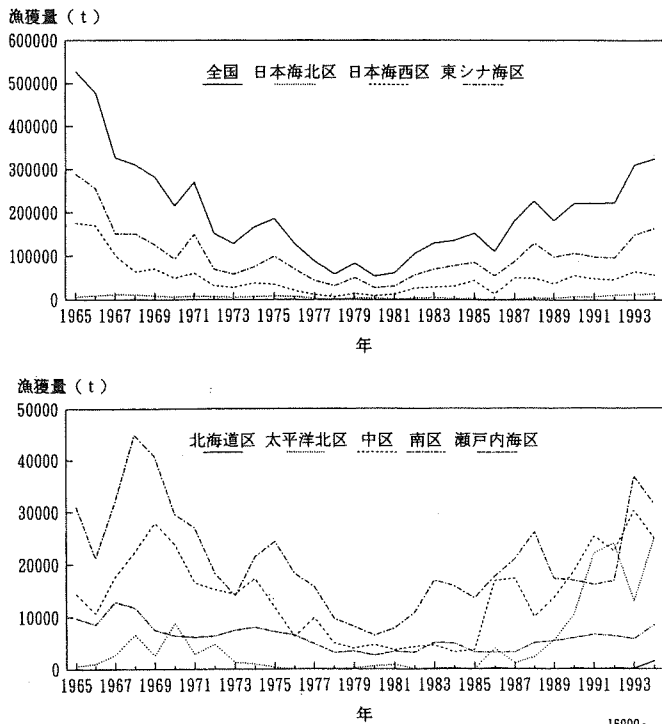


図2 農林水産統計によるマアジ漁獲量の経年変化

1986年に太平洋岸で優勢な発生群が出現し、その後増加に転じた(図2)。漁獲動向からみて、現在はまだ増加期にあるとみられる。農林水産統計の鹿児島～三重県における県別マアジ漁獲量の経年変化を図3に示した。予報会議資料から0歳魚の漁獲動向をみると、最近年における優勢な発生群は三重県では1989・1990・1993年にあったと推定されている。鹿児島県においても同じ年に0歳魚が多獲されていることから、熊野灘にも東シナ海～薩南域からの補給が多かったと判断される。

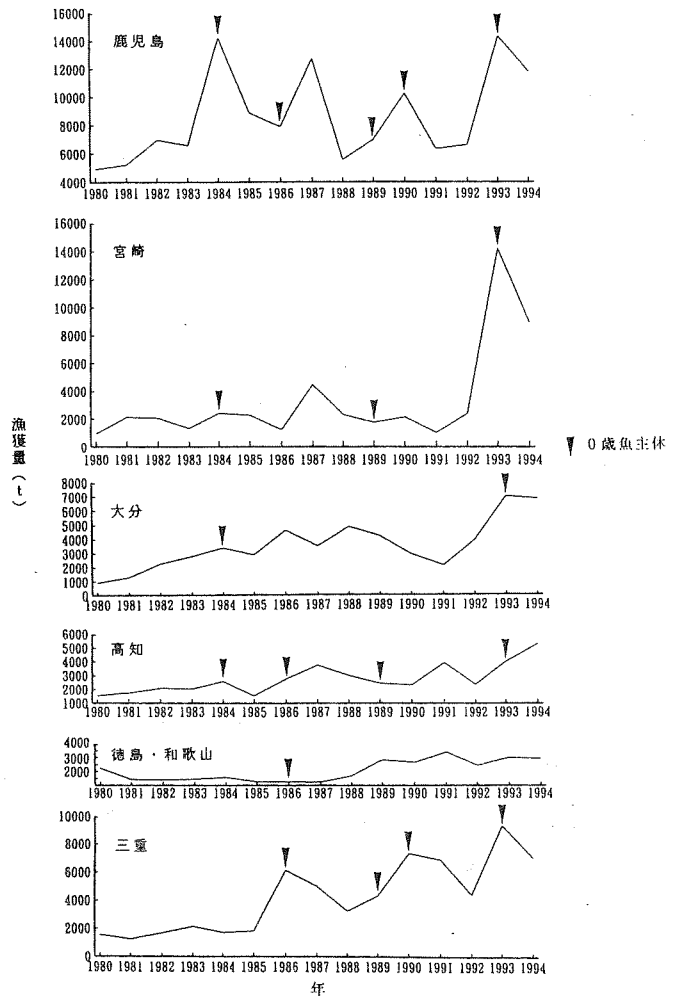


図3 鹿児島～三重県における県別マアジ漁獲量の年変化

宇久井定置網のマアジ漁獲量は年変化が著しく、1985～1994年の10年間では、1985・1990年が不漁年、1991・1994年が好漁年と判断される（図4）。好漁年には、特に銘柄「小」の占める割合が高く、1991

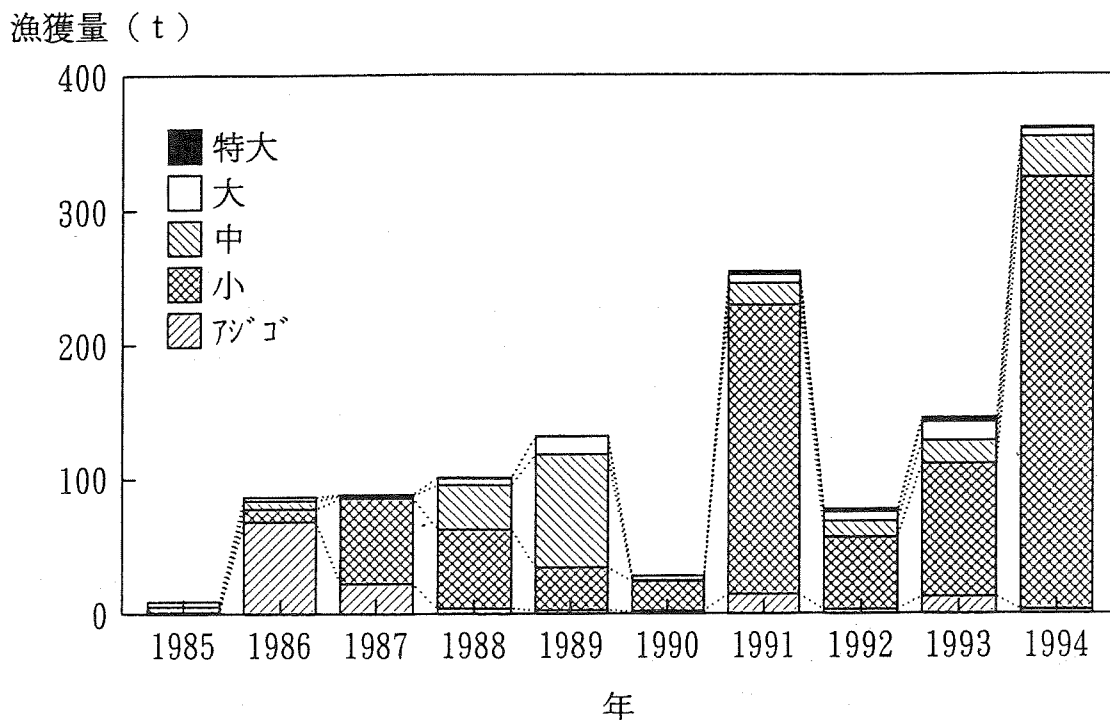


図4 宇久井定置網におけるマアジ銘柄別漁獲量の年変化

年は「小」が年全体の85%、1994年には89%を占めている。銘柄「小」は、体長測定結果から主に1歳魚であった。1991・1994年とも優勢な年級群が発生した翌年に当たることから、0歳魚が大量発生した翌年に、1歳魚主体に好漁になっていることがうかがえた。ただし、1987年はその傾向に当てはまらなかった。宇久井定置網におけるマアジ銘柄別漁獲量の月別変化を図5に示した。盛漁期は春季の4～6月で、この3ヶ月間に年間の42.9～96.5%を漁獲している。3～6月の日別漁獲量と10m層水温の日別変化を比較してみると、例外はあるが、16℃に昇温してから入網し始める、水温変動時に入網が多い、急激に昇温したときにまとまって入網するなどの傾向がみられた（図6）。

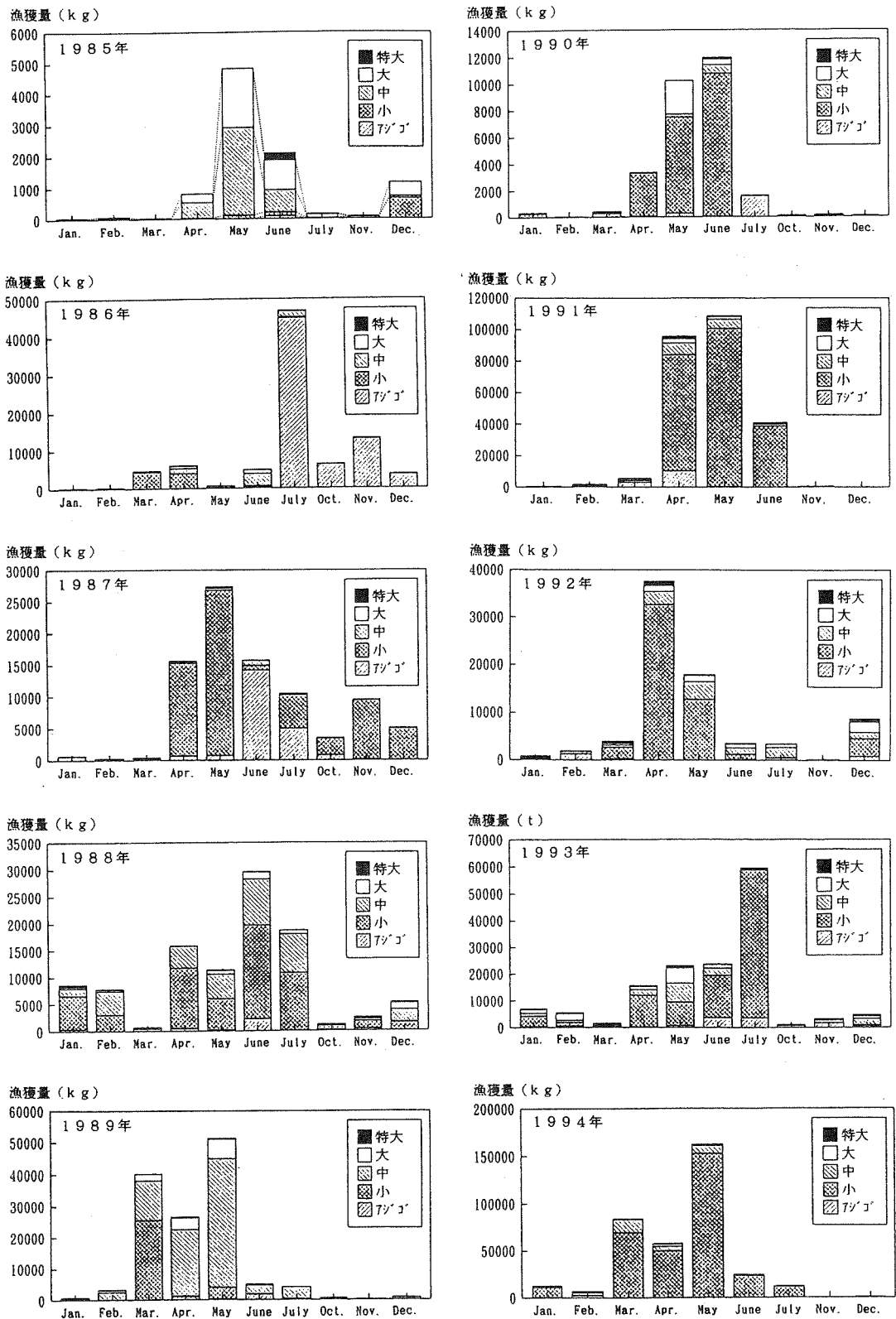
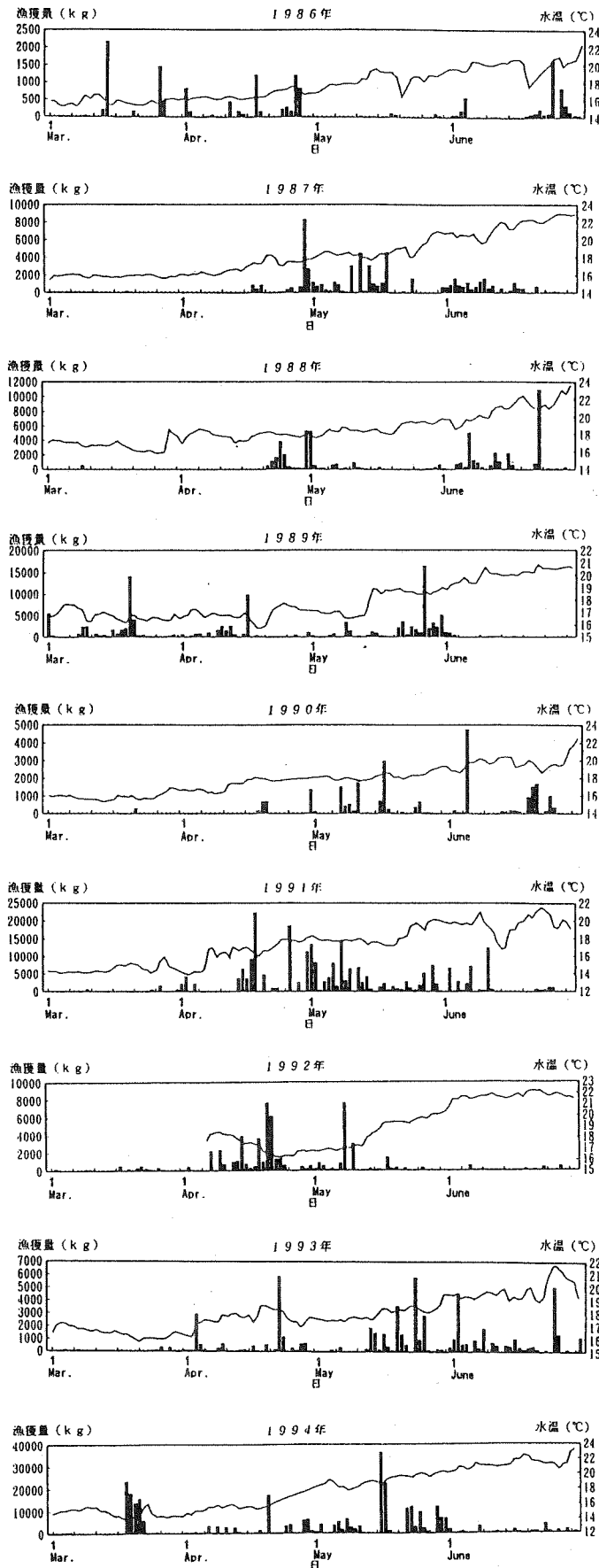


図5 宇久井定置網におけるマアジ銘柄別漁獲量の年変化



今回の解析結果から、宇久井定置網でのマアジの漁獲は、春季に重点があり1歳魚が漁獲の主体であること、その漁獲は資源・海況両面の影響を強く受けていることが改めて明らかになった。

図6 宇久井定置網におけるマアジ漁獲量および漁場水温(10m層)の日変化